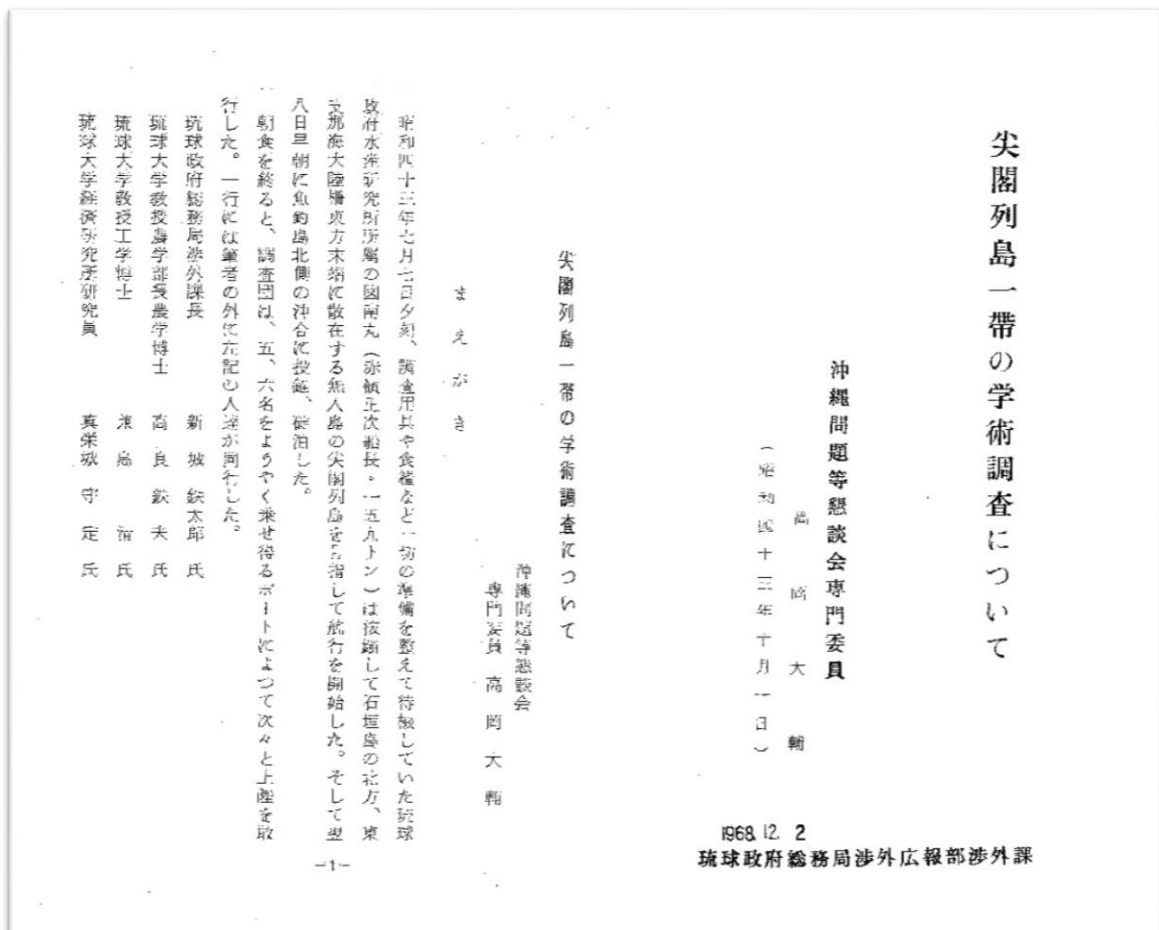


尖閣列島一帯の学術調査について

沖縄問題等懇談会 専門委員 高岡大輔



1901年（明治34年）新潟県新津市に生まれる。東京外国語大学卒、衆議院議員当選5回、新潟新聞、大蔵土木、日印協会カルカッタ商館在勤、台湾総督府政治顧問、（財）日印協会理事・副会長を経、（社）国際建設技術協会顧問、（財）南方同胞援護会理事、沖縄問題等懇談会専門委員を歴任。1990年逝去、享年89歳



※本冊子は、日本政府及び琉球政府関係者に配布にもされたものである。

（沖縄県公文書館所蔵）

尖閣列島一帯の学術調査について

沖縄問題等懇談会 専門委員

高岡大輔

(昭和四十三年十月一日)

まえがき

昭和四十三年七月七日夕刻、調査用具や食糧など一切の準備を整えて待機していた琉球政府水産研究所所属の凶南丸（赤嶺正次船長・一五九トン）は抜錨して石垣島の北方、東支那海大陸棚東方末端に散在する無人島の尖閣列島を目指して航海を開始した。

そして翌八日早朝に魚釣島北側の沖合に投錨、碇泊した。

朝食を終ると、調査団は、五、六名をようやく乗せ得るボートによつて次々と上陸を敢行した。一行には筆者の外に左記の人達が同行した。

琉球政府総務局渉外課長	新城 鉄太郎 氏
琉球大学教授農学部農学部長農学博士	高良 鉄夫 氏
琉球大学教授工学博士	兼島 清 氏
琉球大学経済研究所研究員	真栄城 守定 氏
茨城大学助教授経済学部	北岡 甲子郎 氏
琉球政府気象庁海洋係長	伊志嶺 安進 氏
琉球政府通産局工業課職員	大城 盛俊 氏
八重山气象台観測係長	正木 譲 氏
八重山地方庁経済課係長	田代 浩 氏
石垣市役所水産課係長	田盛 恒武 氏
八重山警察署巡查（完全武装）	平良 繁治 氏
同	伊良波 幸勇 氏
琉球新報写真部員（特別参加）	松田 賀勝 氏
	以上

調査団の一行は同日午後四時、魚釣島の調査を一応終了して凶南丸に乗り込み、魚釣島を一周し、急ぎ南小島に向かい、その沖合に碇泊した。

これは南・北両小島に群がる鳥類の生態を視察するためであった。

翌九日、朝食後直ちに南小島に昨日と同じようにボートによって上陸し、中食後、一旦凶南丸に帰り、午後是一行の中の数名だけが北小島に上陸して調査を終了し、黄尾島がアメリカ軍の爆撃演習地になつており、上陸出来ないことがわかつていたので、日没前に至近距離

の船上から視察すべく船の出航を急いだのであつた。幸い日没前に黄尾島に近づき得たので、島をゆつくりと一周して石垣港への帰途についた。

斯くして、尖閣列島の視察を終了したが、学術調査などと銘打つことは出来ないが、一応の調査をすることが出来た。

帰京後、同行者から視察報告書の郵送を依頼し、八月三十日午後一時半より総理府特別会議室において尖閣列島調査報告会が開かれた。

会議は座長大浜信泉氏によって進められ、筆者が報告した後に質議応答があり、午後四時半に及んで閉会した。

当日の出席者は次の通りである。

総理府総務長官	田 中 竜 夫 氏
総理府総務副長官	弘 津 恭 輔 氏
総理府特別地域連絡局長	山 野 幸 吉 氏
総理府特別地域連絡局参事官	加 藤 泰 守 氏
総理府特連局総務課長	及 川 兼 三 氏
総理府特連局援助業務課長	岸 良 明 氏
気象庁海洋気象部調査官	曾 佐 富 士 雄 氏
石油開発公団技術部地質課長	岩 佐 三 郎 氏
科学技術庁資源調査会会長	内 田 俊 一 氏
南方同胞援護会会長	大 浜 信 泉 氏
通商産業省地質調査所所長	佐 藤 光 之 助 氏
南方同胞援護会評議員	末 次 一 郎 氏
国立防災科学技術センター所長	寺 田 一 彦 氏
九州石油開発株式会社顧問	新 野 弘 氏
農林省東海区水産研究所所長	日 高 武 達 氏
海上保安庁水路部参事官	川 上 喜 代 四 氏
山階鳥類研究所所長	山 階 芳 麿 氏
南方同胞援護会専務理事	吉 田 嗣 延 氏

以上

右の会議において活潑な質議応答があつたが、その後、各発言者から文書による見解の発表を願つたので、ここに、それ等を収録して、尖閣列島一帯に対する報告書に代えると共に、学術調査団の派遣が一日も早く実施されることを切望する次第である。

尖閣列島一帯における学術調査についての結論

尖閣列島一帯における学術調査は後段において述べる理由によつてではあるが、急いで実施する必要がある。もつとも調査を第一次学術調査、第二次学術調査、第三次企業調査と順を逐うて実施するものとする。

第一次の学術調査は、従来の視察や調査による資料では、男女列島一帯における学術調査に対して、同じ東支那海の大陸棚に在る尖閣列島一帯については余りにも推測によるものが多いので、それらの諸点を究明することが第一の目標とならざるを得ないであろう。

調査対象としては鉱物、魚族などの資源関係、動物（主として鳥類）、植物関係、海洋関係、気象関係と将来の経済開発のための基地の建設関係とする。従つて、学術調査員の数は二十名、助手十名の合計三十名程度とする。第一次の学術調査はその基地を石垣港とし、調査日数を六週間乃至八週間とし、調査期日は次年度第二次学術調査の予算計上を考慮すると共に梅雨季と台風時を避けるため、六月末乃至七月上旬に調査を終了するように調査日程を編成することが望ましいが、調査対象によつては早期に引揚げ得る調査員もあるであろう。

第一次学術調査に当つては、幸い水産大学乃至他の大学所属の船舶を借用することが出来、学生諸君から実地訓練としての参加が得られ、更に学術調査に必要な機械、器具類まで借用することが出来れば、経費の点は食糧始め消耗品の購入費と、石垣港において上陸宿泊する際の経費の外、若干の雑費と予備費だけであり、恐らく諸経費の合計額は一千万円以内であろう。勿論、第二次、第三次の調査についての経費は第一次調査の結果に俟つ外はない。

理由

(1) 国政参加、施政権返還、本土復帰と本土との一体化が逐次実現しても、沖縄住民の精神的満足が得られても、本土との生活水準の格差は容易に是正されず、沖縄住民の思想的混乱を招き、動もすれば救いようのない政治的混乱をも招くであろう。

即ち、沖縄の経済発展の裏づけが絶対であり、それによつてのみ沖縄住民の幸福と沖縄経済の安定が確保され、そこに国政参加、施政権返還、本土復帰が完成されるものである。

この秋に当り、沖縄経済の画期的発展を尖閣列島一帯の経済開発が決定づけるからである。

(2) 尖閣列島の一帯を含む東支那海の大陸棚に対する学術調査はアメリカなどによつて地質、地球物理的調査研究が開始され、エカツプエ沿海鉱物資源探査調整委員会の探査計画の一環として、この海域が採り上げられて国際的脚光を浴び、既に航空機による磁力調査を行つて堆積層の厚さの調査を終了し、更に引続き本年（一九六八年）九月三十日より十一月二十二日に亘り、アメリカ・ウツズホール研究所の企画により、黄海から東支那海大陸棚全域に亘る海底地質調査が実施されようとしているのである。

大陸棚に関する国際条約は国際連合によつて提唱され、一九五八年に発効し、既に二十二カ国が加盟している。

この大陸棚条約は、その鉱物資源は沿岸国の主権に属し、二カ国間の大陸棚の場合は、二カ国の沿岸から等距離線において二分されることになっている。

大陸棚の定着性動物についても、同条約に規定されているが、条約結成の主目的は鉱物に在ったことは事実である。

日本は大陸棚条約に加盟していないが、その理由は日本列島周辺に余り大陸棚がないためなのか、どうかは明らかではないが、尖閣列島が東支那海大陸棚に存在するためかその権益に対しては極めて消極的であるが、この際、日本は進んで大陸棚条約に加盟すべきであり、尖閣列島一帯の経済開発に努力すべきであり、悔を千載にのこしてはならない。

今日まで沖縄における天然瓦斯の調査が前後三回に亘つて調査され、有望視されているが、尖閣列島一帯の大陸棚については極めて大雑把な調査にも拘らず、桁違いの一大油田、天然瓦斯の埋蔵が推理されており、更に海流の関係から豊富な漁場であることが確認されているのである。

(3) 尖閣列島一帯に対する経済的な価値は、沖縄における唯一、最大の忘れられている宝庫と言つても過言でないが、その経済開発を進めるためには、多くの調査、研究を必要とすることは勿論である。

一二の例を挙げれば、新野博士は地質構造についても東支那海の大陸棚に散在する諸島の基盤に海成の第三紀層が発達していることが明らかとなつており、その大陸棚末端に沿つて皺曲帯が発達していることも推察できるのであるが、若し、大陸棚上の新第三紀海成層の推積が厚く、その構造が貯油槽を形成しているならば、尖閣列島より西北に亘る広大な東支那海大陸棚は世界的な油田開発地区となり、欧州における北海油田、瓦斯田を凌駕するものとなるであろうし、その油田は硫黄分の少い油であろうことは東亜の新第三紀産石油の通性であることも推定される、と新野博士は、幾多の資料によつて判定されているのである。

又、日高所長の所説によれば、尖閣列島一帯の海域では幾つかの好条件が具備し、又、実際、好漁場として相当利用されながらも、今日までに得られた資料は断片的であり、今後、この漁場を有効に生かして使用するためには総合された有効な調査、研究の結果を俟つ以外にはないので、早急にその実施が望まれると説き、尖閣列島一帯はその黒潮調査の重要拠点であり、黒潮勢力の消長は漁業上の問題のみでなく、農業などにも大きな影響を与えることは周知のことであり、又、漁況の予報と重要魚の生態調査には好適地であり、更には黒蝶貝や珊瑚の増殖、研究にも好適地と思われるなど、日本の漁業上重要な場所に尖閣列島は位置し、また魚類の生態、資源、環境などの研究面からみても又とない恵まれた海域であるから、尖閣列島に調査基地を設置することは絶対的であり、定期的の調査をすることが必要であり、少なくとも年間二回、出来得れば四回、五百トンから六百トンの水産専門の調査船を派遣すべきであると力説されている。

以上の理由を以つて、この際、急ぎ尖閣列島一帯に対する学術調査の準備を進め、来年度匆々に現地に対する総合学術調査を実施すべきである。

説明

(1) 尖閣列島の位置、面積など

尖閣列島は尖頭諸島とも呼ばれ、数個の小島と岩礁から成っている。これらは台湾の北方約一九〇キロ、西表島の北北西約一五〇キロの距離にあるが、石垣港から時速八ノツトの船で約十二時間を要する地点であり、北緯二五度四〇分から二十六度、東経一二三度二〇分から一二三度四五分の間には散在し、その面積は魚釣島が最も大きく、約一、〇三七エーカー、その定位置は北緯二五度四七・七分、東経一二三度三〇・三分である。ついで黄尾島の面積が約九〇七エーカー、南小島が約三〇九エーカー、北小島が約二五九エーカー、赤尾嶼が約七八エーカーの順となり、その他に数個の岩礁が散在するが、この諸島は東支那海の大陸棚の東方沖の末端に位置する。

赤尾嶼は魚釣島より東方約一〇〇キロの距離にあるが、前者と同様の大陸棚の末端に位置する。これらの諸島は同一の東支那海の大陸棚の末端に在る九州西海の男女列島に続くものである。

(2) 魚釣島の地形と地質など

魚釣島は東西にのびた楕円形の島で、海図で見ると東西三キロ余、南北一キロ余で、面積は四・一九平方キロという。島の南側は高く、北側は緩斜面を成し、数条の小溪流があるが、水量は豊富とは思われない。

過般の現地調査に参加した琉球大学工学部の理学博士兼島清教授の同列島の水質分析によれば、強い酸性の水質で、硫化物の鉱床か、或は硫黄鉱床が存在する可能性があるかと推定された。

兼島教授の説は、硫化銅、硫化鉛、硫化鉄などと空気中の酸素や地下水とが溶解作用を起こして流れ出たものだろう、といい、沖縄本島の水の中に含まれている硫酸イオンが一〇乃至二〇に対し、尖閣列島の水はその約三倍であり、水の中にある硫酸イオンと塩素イオンの比率が大きいところほど、硫化物鉱床の存在が探知される、という。

魚釣島は「くば」が全島を掩うて生え茂り、熱帯特有の植物も見られたが、その山林内の至るところに岩骨が露出しておるが、地質は主として第三紀砂岩と礫岩とである。魚釣島の最高峰は三六二メートルと言われているが、北東部では奇形の岩石が高く累積し、特異の景観を呈しており、海浜には平坦な珊瑚礁が展開しており、ヘリコプターの発着は可能である。

海岸線は単調だが、断崖が多く、殊に南東岸の絶壁は高さ百数十メートルにも達しているが、北西岸及び北東岸には珊瑚礁が舞台状に縁着、隆起しており、渚の珊瑚礁は不規則で凹凸が激しいので、ボートによる上陸は容易でない。西岸に故古賀辰四郎氏によつて船着場として掘割が一カ所あるが、この掘割は十トン級の漁船が出入し得る程度のものであるが、掘割の中で船を廻すことが出来ないので、出航の際は後退しながら外海に出るという不便を免れない。而も、風向きによつては全く利用が出来ないこともあるという。

北岸から東岸にかけての渚には大岩が転っており、南東岸から南岸にかけては絶壁の箇

処があるので、徒歩による海岸線の一周は極めて困難であり、危険である。

魚釣島の地質は主として前述の通り第三紀砂岩と礫岩から成っているが、南西岸の岬から南東岸にかけて砂岩や礫岩の下部に粗粒安山岩の露出が見られ、北側中央部に約六〇エーカーほどの崩壊地があるが、その第三紀砂岩の中に数センチの石炭層が存在しており、砂岩は石英質の砂粒から成り、礫岩をはさんでいるが、礫は丸味をおびており、石英岩から成っていることから、これらの堆積岩は、嘗て中国大陸の奥地から河川の流れによつて移動して来たものによつて形成されたものと兼島教授は推定している。

これに対し、魚釣島より持ち帰つた岩石を理学博士新野弘氏の調査研究によれば、変質した安山岩と礫岩であり、礫岩を構成するものは花崗片麻岩と花崗岩などの深成岩、放散虫チャート、角岩、スレートなど中国大陸の古生層又は前古生層に属するものであり、又、礫を凝結しているものは円形石英粒などで、礫岩は恐らく中国大陸に源するものとのことである。

新野博士によれば、魚釣島の東北方面の海底からは多くの箇所で見られる新第三紀の海成である証拠を示す頁岩、砂岩が採取されておるといふ。

地質構造についても中国大陸の大陸棚東部末端に沿つて皺曲帯が発達していることが推察出来ると新野博士は言う。

この辺一帯の水深は一〇〇メートル乃至五〇メートル前後であるから、現時点においても開発が十分可能であり、尖閣列島周辺を始め東支那海大陸棚上の諸島は東支那海大陸棚の基盤に海成の第三紀層が発達していることは既に明白なので、若し、この大陸棚上の新第三紀海成層の堆積が厚く、その構造が貯油槽を形成しているならば、尖閣列島より西北に亘る広大な東支那海大陸棚は世界的な油田開発地区になり、欧州における北海油田瓦斯田を凌駕するものとなるであろう、と新野博士は力説する。

これに対し、地質調査所長の理学博士佐藤光之助氏は、今直ちに石油資源の開発には幾多の技術的困難性はあるが、将来の問題としても、早急に国としての対処方針を固めねばならないとの見解である。

(3) 南・北小島について

魚釣島の東北東約五キロの海上に南・北小島は約二〇〇メートル隔てて位置し、両島とも楕円形をなしているが、南小島の東南部には縁着した珊瑚礁が舞台状に隆起しており、ヘリコプターの発着陸は十分可能であるばかりか、その平坦地帯は見渡したところ、二、三十ヘクタールもありそうで、一面に雑草が生え茂っていた。

この平坦地を除いては、両島とも険しい地形を成しており、その断崖絶壁は奇観という言葉を超えている。蓋し、黒い冰山と形容されるのは適評である。

南小島の最高峰は海拔一四九メートルで北小島の最高峰は一二九メートルと言われている。勿論、両島とも海岸渚線には珊瑚礁が縁着しているが、ボートで上陸するには極めてきびしいものがある。

魚釣島に対して南小島の北東部と西部には洞窟があつて地下水が滴下しており、西部の洞窟内に故古賀辰四郎氏によつて設けられた貯水タンクが現在に至るも形を留め、可成りの溜水があつた。

この地下水は琉球大学教授の農学博士高良鉄夫氏の説によれば、鳥糞より滲じみ出たためか酸味が強く、飲料水には不適であるという。兼島教授によれば、黄色に着色されており、分析の価値があるという。

両島の地質は殆んど第三紀砂岩と礫岩とから成つており、魚釣島に類似しているが、両島とも至るところ岩骨が露出し、土壌は僅かに岩間に見られる程度であり、立木は殆んど見られない。従つて鳥糞は岩肌に付着し、乾燥し、雨水によつて海中に放流されている。

北小島を遠望すると、インドのカイラーサ寺、カンボディアのアンコール・ワット、インドネシアのボロブドールなどを想起するに十分である。

(4) 黄尾嶼と赤尾嶼について

黄尾嶼は魚釣島の北東一五哩の海上に在るが、アメリカ軍の爆撃演習場とされており、永久危険地区に指定されているというので上陸は出来なかつたが、その面積は魚釣島につぐ島で、三・六七平方キロと言われ、その最高峰は一八メートルと言われている。

幸いと言うか、視察中はアメリカ軍の爆撃演習を中止しておつたので、乗船の凶南丸を能う限りの至近距離を島と保ちながら一周したが、全体としては平坦な地形で、「くぼ」が広範囲に繁茂しており、又、島の南面には野生化した数ヘクタールの甘蔗畑が遠望されたのが印象的であつた。視察団一行の中にはパイヤの木も見受けたという。この外にも柑橘類もあるという。そして、それらはすべて、故古賀辰四郎氏が曾つて移植し、作付けしたものだという。

黄尾嶼はほぼ円形を成しており、海岸線は出入に乏しく、大方断崖になつている。

島の中心部には三つの峰が見られ、東北面は傾斜が急であるが、西南面は緩い傾斜をしている。島内には小起伏はあるが、高良博士の観察では魚釣島ほどに地形は複雑ではなく、地質も単純のようであり、甘蔗畑の繁茂状態からみて、土壌は肥沃である、という。海岸線は遠望したところ、魚釣島のような縁着した隆起珊瑚礁も余り見当らず、砂浜も全く無かつたようである。

赤尾嶼は前述したように、更に一〇〇キロの距離にあつて凶南丸のこれからの行動日程からみて視察する時間的余裕がなかつたことと、日程を無理するとしても、潮の流れが早く、一五九トンの船では転覆の怖れもあるというので、赤尾嶼の視察は割愛したが、高良博士の話によれば、赤尾嶼は最高峰が海拔八四メートルで面積は僅か〇・三一平方キロ、全島は全くの岩礁で、地質は第三紀砂岩を主体としているようであるとのことである。

(5) 尖閣列島一帯における気象と潮流について

尖閣列島一帯の気象に関しては確実な資料がないが、沖縄本島の南部地区と殆んど差が

ないようで、魚釣島で長期間に亘つて鰹業に従事した古老の話によると、夏季は涼風に恵まれて凌ぎ易いが、冬季間は北風の来襲に伴つて概して寒く、しばしば暴風状態になることがあるという。

故古賀辰四郎氏が構築した石垣が魚釣島と南小島とに見られたが、それは激しい風波を凌ぐための防風垣であつたということからも、季節によつては暴風雨に見舞われることが推察されるのである。

東支那海を台湾東海から北上して来る黒潮は魚釣島附近で北東に転向し、更に赤尾嶼附近で再び北方に方向を変えているという。それは南方系植物の漂流物が、これらの島々の沿岸に打ちあげられていることから証明することが出来るというのである。

この黒潮の速度については十分な調査がなされていないようだが、時速四漚に及ぶことがあるという。

過般の現地視察に参加した琉球気象庁海洋係長伊志嶺安進氏の調査は時間的にも、地域的にも極めて制約されたものであつたが、その調査結果によれば、

- (イ) 魚釣島泊地の潮流は大体 1.5kt 未満。
- (ロ) 南・北小島の泊地は地形的影響もあつて魚釣島泊地の潮流よりは弱い。
- (ハ) 南・北小島の泊地の回転潮流については、今後更に詳しい資料によつて 1/4 日周潮の有無を検討すべきである。
- (ニ) 調査は泊地に限られたが、島の周囲に激潮の生ずる場所があるかも知れない。
- (ホ) 魚釣島から四哩離れた水深九〇メートルの海底から採泥を試みたところ、径約 〇・五 mm 内外の大粒の砂であつたが、海底の底流と粒度との関係についても吟味されなければならない、と言う。

東海区水産研究所所長日高氏によれば、一〜三ノットの速力で絶えず北上を続けている台湾東岸の黒潮は尖閣列島附近で大陸棚上の沿岸流と遭遇し、台湾の北部にかけて非常に大規模な潮目を形成している。この附近の塩分 (C) が一八・〇〇‰から一九・五〇‰の変化を示すことから、低い時は沿岸流の強い時であり、高い時は黒潮の勢力が勝る時と考えられ、潮目は或る程度の南北移動はするものの、常にこの尖閣列島一帯に存在して好漁場を形成している。

又、絶えず、この一帯における大陸棚縁辺にまともに突き当たる黒潮の流れは常に渦流 (小規模な湧昇流) を起し、高い気温と水温、強い太陽の光線の恩恵で盛んな光合成作用が行われ、常に豊富な魚の餌を生産しているものと思われる。

黒潮勢力の消長は漁業上だけの問題ではなく、気候、ひいては農業などにも大きな影響を与えるものであり、黒潮の状態を早く 見、その変化を予知することが出来れば大変なプラスとなるが、台湾の東岸を岸に接近して流れている黒潮本流は北上して真正面から尖閣列島に突き当たり、水深二〇〇メートルの大陸棚縁辺に沿ひ北東に方向を変え、この附近より北西に向う一枝流を出すというのは疑問であるが、更に北上し尖閣列島一帯の学術調査につ

いてて対島暖流を分ち、本流は日本の東岸を洗い、銚子沖から東に流れ去るのであるが、これらの詳細については不明のことが余りにも多く、台湾東岸沖の冷水塊との関係などは、この尖閣列島に拠点を設け、附近の黒潮を十分押え得れば、北上黒潮の年変化の予察などが相当正確にみ得るようになり、益するところが甚大だという。

又、国立防災科学技術センター所長寺田一彦氏の説によれば、尖閣列島は黒潮の一分岐が台湾東に沿って北上する地点であるが、この分岐は常時存在する訳ではないが、往々にして上海近くの東支那海中央部にまで達する。こういう場合は、この分岐の根元に当る所は石垣島、宮古島に拡がることもある。

この分岐と支那東海の冷い海水との間には顕著な不連続の区域が発達し、ここが豊富な漁場となる、という。

これは又、その附近での大気中への水蒸気の補給状況が異なる原因となるので、台湾北東部に低気圧の発生を促がす因となるが、この低気圧は特に冬期間にしばしば起り、急速に発達して関東地方の大雪をもたらす因となる。

こういう観点から尖閣列島附近の気象と海象には研究すべき項目が多く含まれている。

(6) 尖閣列島の海域における漁場について

尖閣列島近海はイルカ、アオウミガメ、シュモクサメその他の漁族が豊富で、冬期にはカツオ、カジキなどの魚獲を狙って沖縄各地からは勿論のこと、遠く本土からの漁船も見られ、冬期間の漁場は壮観を呈するが、春から夏にかけては黒潮の南下で漁船の往来は殆んどないという。

筆者等一行を乗せた凶南丸は前述のように七月七日に石垣港を出航し、翌朝に魚釣島に到着したのであつたが、その沖合に中華民国（台湾）の漁船を数艘見受けた。その時、漁船は何時ともなく遠ざかったが、同日夕刻、南小島の沖合に向うと、漁船は船団を組み、その数は二十数艘に及んでいた。彼等は台湾の蘇澳の漁民だつたが、三メートルほどの太い竹を十数本を結んだ筏を幾つとなく船に載せており、その筏を巧みにあやつつて海上を漕ぎ廻り、珊瑚礁の渚にも容易に接近して行くのであつた。

彼等は南、北両小島を碇泊地としてカツオの一本釣りをやり、島に棲息している海鳥類の卵や雛を乱獲しているのであつた。

九日早朝のことであつたが、凶南丸の乗組員達が舷側に陣取つて糸を垂れていたが、三十センチから四十センチのほどの鯛を面白いように釣り上げているのであつた。

鯛ばかりではなく、大きなエビも、真紅な魚なども釣り上げていたのであつた。

八重山地方庁の田代浩氏の話によれば、近年、台湾漁船の不法入域によつて海鳥の卵や雛の乱獲によつて、カツオの群の発見が困難となり、毎年カツオの漁獲高が減少し、鯉節製造業が経営不振となり、魚釣島、南小島には戦後、石垣船籍一隻、戦後、宮古島船籍二隻は、嘗つては頗る有望視されておつたものだつたが、遂にカツオ餌の不足もあつて、遂に現場を引揚げてしまった、という。

漁場となるのは多くの餌があつて多くの魚を育て集め、又、魚を滞留させるところであるが、尖閣列島附近の海域は以前からカツオ、マグロ、カジキ、サメ類などの豊かな漁場であり、又、最近では東支那海のサバ、アジの三分の一、即ち五万乃至七万トンを生産するといわれる好漁場ともなっているが、その理由について東海区水産研究所日高所長は次のように説明する。

その理由を考えてみると、大陸棚の沿岸流と黒潮とが、尖閣列島附近で混合して大規模の潮目を造るところであり、又、黒潮が真正面からこの大陸棚にぶつかるので、広範囲に渦流（小規模の湧昇流）を生じ、栄養に富んだ水が常に下層から補給されるという二重の好条件に恵まれているからのようである。

潮目のあるところ、湧昇流のあるところは必ず好漁場であるという水産上の定義は果して真実であるか、その漁場成因の原理を究明するには、またとない場所と思われるとのことである。

更に日高所長は、北上するカツオ、マグロ、カジキなどの一部は必ず尖閣列島海域を通るので、ここの漁業状況から北上群の資源を予察することが出来るのではあるまいか。又、十分な調査はされていないが、サバ、アジ、カタクチイワシなどの卵や稚魚の発生状況からして東支那海のこれ等の資源の重要な再生産源の一カ所のようにも考えられるので、これらの発生状態を調べれば、これら魚類の漁業予報の一助となるものが得られるようにも思われるとの意見である。

日本近海では生態の未だ十分明らかにされていない魚が相当あるが、その中のカツオは北上群（索餌群）の一部で必ず尖閣列島海域を通るので、南下群（産卵群）も亦ここに立寄るのではあるまいか。ブリも何処で産卵するのかわかっていないが、この附近では卵や稚魚が採捕されており、ウナギに至つては今まで日本中で真のウナギの稚魚は二尾しか捕らえられていないと言われているのに、尖閣列島附近の海域では多数のウナギ類の稚魚が採捕されている。

沖縄の養殖として有望視されているものに黒蝶貝があるが、現在は母貝はおろか、人工採苗のための親貝にさえ事欠く状況にある。恐らく、尖閣列島附近は餌が多いと思われることから、親貝、母貝になるものも天然に多く生息しているように思われるので、親貝を集め、これらより人工採苗によつて多くの稚貝を生産し、これらをこの附近に再放流して母貝、親貝の養成と循環させれば、相当の黒真珠が得られるのであろう。珊瑚も環境などから推察して良質の珊瑚の生息地のようである。

尚、底魚については全くの資料不足ではあるが、一本釣、底延縄の魚種としてはアラ、マツダイなどの磯魚が相当多いようであり、今のところトロール魚種としてはシタビラメ、アマダイ、甲イカ、エソなどがあげられているが、表層の餌料が多いようであり、底層も餌が多いと思われるのであるが、それは今後の調査に俟つ外はないと、日高氏はいう。

(7) 滅び行く海鳥の楽園

琉球大学の高良教授によれば、アホウドリは古くは沖縄各地の海岸に棲んでいたことは、文献や言い伝えによつて明らかであり、それが人文の発達によつて次第に主要島から遠ざかり、遂に僻遠の無人島にのみ棲息するようになる。

記録によると、旧藩時代に福州方面への航海に際し、赤尾嶼や魚釣島の海岸に海鳥の多いことが目撃されており、いろいろの事情から、その中にアホウドリが混じっていたことが推察するに難くない。

黄尾島における羽毛の採集は明治十八年から本格的に行われているが、当時、アホウドリやクロアシアホウドリは尖閣列島全域に亘つて棲息していたといい、殊に黄尾島は島全体がアホウドリ、クロアシアホウドリで掩われ、魚釣島には推定数十万羽いたことが伝えられている。アホウドリの綿毛が非常に珍重されたので、明治三十年頃のアホウドリの捕獲数は、年間十五万羽を下らなかつたといわれている。

明治二十八年頃、沖縄本島から来た漁船の船頭が船中で飼っていた雌、雄一対の猫が黄尾島に逃げ込み、これが蕃殖して五カ年後には約二千匹に達し、アホウドリが著しく減少した原因は、濫獲と共に猫による危害によるものであろう、という。

大正年間における尖閣列島におけるアホウドリの記録は見当らず、出漁の古老の言によると、大正の中期頃、南、北小島にクロアシアホウドリが少数分棲していたという。ところが、昭和時代になると、アホウドリの姿は全然見られなくなり、高良教授が昭和二十七年、初めて尖閣列島の学術調査に赴いた際には、既にアホウドリは勿論、クロアシアホウドリも確認することが出来なかつたという。

高良教授が昭和二十八年に調査された時は北小島の全面に三〇センチ置きに卵と雛とが散在し、上空には無数の親鳥が飛んでおり、僅か一〇メートル離れても会話が通じないほどであり、百万羽と推定したほどであり、鳥糞のアンモニアの臭気が激しく、島内に一時間滞在するのは容易でなかつたと言う。

それから十年後の昭和三十八年、沖縄の文化財保護委員会によつて実施されたアホウドリ調査のための学術調査が行われた際にも高良教授は同行されたが、その話によるとアホウドリは全然見られなかつたし、黄尾島がアホウドリの本場とみられていたのに、前にも述べたように、危険地区に指定され、上陸が禁止されていたため、黄尾島の調査は成し得なかつたので、黄尾島におけるアホウドリの存否は判明しないという。

南小島と北小島との間は僅か二〇〇メートルに過ぎないのに、そこに棲息している海鳥は著しく趣きを異にし、興味ある分布状況を呈している。両小島の海鳥の主なるものはセグロアジサシ、カツオドリ、クロアジサシ、オオミズナギドリなどであるが、北小島の海鳥類で最も多いのはセグロアジサシで、全体の約九割を占めていた。そしてその数は推定で約五十万羽で、十年間で半減したのであつた。

それから五年の歳月が流れた今年、又々、高良教授の同行を得たのであつたが、南小島の南部平地に群棲していたセグロアジサシは殆んど絶滅しており、人間の近づき得ないよう

な断崖にセグロアジサシとカツオドリとが生息しておつたが、その数は一万羽と推定せざるを得なかつた。北小島のセグロアジサシは二、三十万羽と推定したが、現在のような台湾漁民による乱獲が続けば、二、三年間に、北小島の海鳥類も南小島同様になるであろうと、思われるのである。

山階鳥類研究所所長山階芳麿氏は農林省所管の鳥獣保護区の設定と文部省所管の天然記念物指定を要望されているが、海鳥の群棲地は学術上から貴重であるばかりでなく、魚群を探知するという水産関係からも重要であるので、厳重な保存が必要であるという。

尖閣列島にはアホウドリ、カツオドリ、オオミツナギドリ、セグロアジサシ、クロアジサシの五種類が記録されているが、アホウドリは絶滅したものとされているが、八重山群島の近海における観察によれば海鳥の種類は十五種の多きに達していることを併せ考えると、尖閣列島に蕃殖する海鳥の種類も五種の外にもあると見るべく、その中には学術上、貴重な海鳥も棲息しているのではないかと推測され従つて、熟練した海鳥の研究者によつて十分な調査を行うことが急務であると訴えている。

その調査に当つては蕃殖期を選ぶべく、尖閣列島の緯度の関係からみて概ね四月末から八月始めまでの間であり、鳥類は極めて移動性が強く、何かに驚けば直ぐ飛び散つて位置を替える。その上、鳥類は日中は餌を求めて島を飛び去つているので、朝や夕刻が観察には大切な時間なので、調査員は島内に泊ることが望ましいのである、と。

(8) 尖閣列島の動植物について

多和田氏の昭和二十七年の調査によると、魚釣島と南小島における植物は羊歯植物以上八九科、二三五種、二変種となつている。

魚釣島は北部の岩山を除くほかは、植物の成育がよく、特にクバ(ビロウ)の成育は目立つており、全島到るところにクバの繁茂を見る。魚釣島の山林内における顕著な植物はクバのほか、シロガジマル、アコウ、タブノキ、クスノキ(移植)、シマグワ、アカテツ、イヌマキ、イスノキ、ヒカゲヘゴ、クロツグ、リュウキユウガキ、トウヅルモドキ、オオタニワタリ、イリオモテラン、ムサシアブミ、竹(移植)などである。イヌマキ、シマグワなどの有用樹種は人為的侵害をうけて急峻な箇所以外は幼樹のみが残つているに過ぎないとのことである。

海岸の樹木は殆んど灌木状になつており、樹冠は相互に入り込んでいるので、林内に入ることは容易でない。又、斜面を掩う樹林は海上から眺めると、恰も絨毯を敷いたようであるが、これらは厳しい風波と地形の影響によるものであろう。

海浜の岩石地帯にはアカテツ、ハマゴウ、シロガジマル、クサトベラ、モンパノキ、ホソバワダン、ボタン、ボウフウ、アダンなどが多く見られ、砂地にはグンバイヒルガオ、ハマヒルガオ、ハマナタマメ、ハマオモト、テツポウユリ、ハマボツス、ツルソバなどが見られる。魚釣島の有用植物が乱伐されていることは無人島だからであるが、これをこの儘に放任して置くことなく、寧ろ魚付林として積極的に保護育成すべきである。

黄尾島は全島が樹木と雑草で掩われているが、樹木の種類は判然しないが、その樹相から見て、クバの外にアコウ、ガジマル、タブなどが主なもののようであり、草本植物は魚釣島と大差ないようであり、同島の開拓当時、故古賀辰四郎氏によつて植え付けられた柑橘類があるとも言われ、野生化した甘蔗畑が認められた。

南小島の樹木は乏しく、僅かに南西岸と東部海浜砂地にシロガジマル、モンパノキ、クサトベラの類が生えていたが、この外に草本植物としてはギシギシ、ハマダイコン、メヒジバ、ハマキケマン、イソスゲ、タカサゴマンネングサ、ハマボツクスなどが岩間の土に極めて良好な成育をしているが、それは海鳥糞が肥料効果をもたらしているためと、高良教授は言う。

北小島には樹木は全く無いが、草本植物だけであり、その種類は南小島と殆んど同じであり、特記すべきものとしてはノゲタイヌビエが海鳥糞の流れ込んだ小溪流に群落を成していることである。

赤尾礁には樹木は全然生育しておらず、海上よりの観察では、いくらか草本植物が生えているのが見受けられたという。

次に尖閣列島の動物についてであるが、特殊な動物としては、オオコウモリの一種、カラスバトの一種、爬虫類では臭蛇がある。オオコウモリはヤエヤマオオコウモリとは多少異なっているが、カラスバトはヨナグニカラスバトと同一種であるかどうかは明らかでない。

シウダは無毒の蛇の一種であり、沖縄内では尖閣列島だけのようであり、尖閣列島以外には台湾、南支などに分布しているという。尖閣列島には蛇の天敵がおらないこと。食物が豊富であることなどから、大形のものも多く、又、個体数も多い。

尖閣列島の陸産貝は種類こそ少ないが、これらは殆んど特有のものである。

今日まで七種の固有種が知られているが、更に綿密な調査をするならば、微小貝の新種が得られると共に、地学上、種々の興味ある資料が提供されるであろう、という。

尖閣列島の有害動物の代表はクマネズミであり、この種ネズミは魚釣島と南小島とに棲息しているが、その発消長は人間の移住と密接な関係があるようであり、その他ジャコウネズミ、ハツカネズミの一種が見られるが、その加害や棲息密度を判定する資料に乏しいので、ネズミ族については、更に調査研究の必要がある。

昆虫類の中で、直接人体に危害を与えるものは次の二種である、という。

(イ) アブの一種であるが、魚釣島の海岸や山林内に見られるが、特に小溪流附近に多い。日中、絶えず人を攻撃し、その刺痛は激烈である。

(ロ) ネットアイエカ

魚釣島の至るところに棲息し、林の中では日中でも人を襲撃し、夜間になると、特に群つて来襲する。隆起珊瑚礁や第三紀砂岩の海浜における水溜りは、これら昆虫類の繁殖場になっている。

尖閣列島の生物地理学的位置を明らかにすることは、従来までの資料では困難であるが、唯、爬虫類や昆虫の分布上から、その一端を窺い知ることが出来るが、それによると、尖閣列島は沖縄というよりは、台湾や中国大陸に関係が深いように思われる

という。勿論、確たる結論を得るためには、今後における十分な調査をなさねばならないと、高良教授は言う。

(9) 尖閣列島の沿革について

尖閣列島は九州福岡県で茶舗を営んでいた故古賀辰四郎氏が山茶を求めて無人島を探険している時に発見されたもので、時は明治十七年（一八八四年）のことだつた、と伝えられているが、実は、それ以前から知られていたが、その所属が不明だつたのである。即ち旧藩時代に、沖縄と清国福州間の航路目標にされていたことは、琉球国中山世鑑や中山伝信録にも述べられており、また一八四三～一八四六年に英艦サマラン号が魚釣島に立寄つた記録がある。

日清戦役後の明治二十九年（一八九六年）に勅令第一三号をもつて日本領土と定め、沖縄県八重山郡石垣村に属せしめられた。現在は石垣市登野城一番地となつている。

尖閣列島の開拓についての詳細は知る由もないが、八重山歴史と古賀辰四郎の嫡男で現在沖縄那覇市に在住の古賀善次氏の話とを総合するに、古賀辰四郎氏が明治十七年に労務者を派遣し、黄尾島の羽毛、バツ甲、貝類の採集に着手したことに始つている。

その後、古賀辰四郎氏は日本政府から三十年の期限で借地権を獲得したが、昭和六年（一九三一年）頃に熊本営林局沖縄営林署を通じて払下げを受けたが、払下げ価格は一万数千円であつたという。

古賀辰四郎氏はカツオドリ、アジサシその他の海鳥の剥製、鳥糞の採集、鰹業と事業を拡張して行つたが、それらの事業がいつ頃まで継続されたかは明確な記録はないが、聞くところによると、大正の中期頃からいろいろの事情で不振になつたらしい。

魚釣島には、その当時建設した工場の跡や野菜を栽培したと思われる荒れ果てた耕地や海岸の珊瑚礁を掘割つた船着場があり、南小島には工場跡と思われるところに水漕やコンクリートが見られ、黄尾島には当時作付けした甘蔗畑が見られたのであつた。

それから再び尖閣列島は無人島となつたが、水産経済事情がよかつた時代には、冬期間、仮工場を設けて鰹業に従事した人達があつたという。

現在でも、魚釣島と南小島とに漁港と避難港とを兼ねた船着場を構築したら、沖縄における漁師達には大きな福音となるであろう。

(10) 学術調査と経済開発についての問題点

新野博士は、沖縄諸島で忘れられているのが尖閣列島であり、この諸島の価値を検討するためには多少の研究調査費と時日を要することは勿論であるが、海底地質の研究者としての立場からすれば、この尖閣列島こそ沖縄諸島の中で最も豊富な近代産業基礎資源を埋蔵しているのではあるまいかと力説する。

これに対し、地質調査所長の佐藤博士も沖縄自身の経済開発の立場と、最近世界的に注目を浴びている海洋開発の立場とから見て、殊に、現在既に沖縄周辺海域においてアメリカな

どにより、地質、地球物理的調査研究が行われつつあると共にエカツフェ沿海鉱物資源探査調整委員会の探査計画の一環として、この海域がとり上げられ、国際的に注目を浴びていることからして、この区域に関する可能な限りの調査研究、更に必要に応じて経済開発の基盤となる探査事業を強力に進めることが望ましく、早急にこれらに対し、国としての対処方針を固めなければならないと提言している。

東海区水産研究所の日高所長は尖閣列島一帯の海域は漁業上極めて重要な場所であり、魚類の生態、資源、環境などの研究面からみても、またとない恵まれたところと思われるので、少なくとも次の二つは直ちに実行することが望ましいとして、内容的に大変ボリュームがあるので、常時調査をしなければならないことが多々あるので、陸上基地並に自動観測施設を設け、一〇トン程度の小艇を用意して定期的調査を実施する。船を別として最低二名の調査員を置き、沖縄水産試験場の出先とする。

その第二として、少くとも年間春秋二回、出来れば四回、五〇〇～六〇〇トン程度の水産専門調査船を派遣し、陸上基地では不可能な巾広い調査を二～四週間実施する。調査員は八名程度が必要か、と極めて具体的な意見を述べている。

学術調査団を早期に派遣すべきであるということは勿論、文中に繰り返えされている。国立防災科学技術センターの寺田所長は、いろいろの点から尖閣列島附近の気象と海象とには研究すべき項目が沢山含まれているので、無人観測所では不十分であり、また、業務を行うためには電源が必要であるので、尖閣列島に施設をしようという時には、電源をどういう形で確保するかを検討して置く必要があるとの注意がある。

気象庁は長い間、鳥島で気象業務をして来たが、エンジンの保守、人員の問題、食料品、日常生活の問題等でいろいろの苦杯を嘗めて来たので、尖閣列島での観測体制を検討する場合には十分の用意が必要であるとのことである。

気象庁海洋気象部曾佐調査官も無人観測所設置の場合は、いろいろ不十分の点があるので、有人観測所が望しく、それにはいろいろのことを考慮せねばならないと寺田所長と同説である。

こうした有人観測所設置の意見に対し、山階鳥類研究所長は海鳥の保護という観点からではあるが、必らずしも専任者の駐在を求めなくとも、鳥島の気象観測員の協力や現在も行われている南鳥島の気象観測員の協力を得ている実例もあるので、尖閣列島に有人の気象及び海洋観測のための施設が出来ることは、尖閣列島の海鳥保存のために熱望してやまないとのことである。

次に日本石油業界が、この海域に対して積極的に取組む気力を削いでいるとして石油開発公団技術部地質課長の岩佐三郎氏が幾つかの点を挙げているので、原文のまま書き綴ることとする。

尖閣列島と男女諸島が日本領土であることは、わが国の石油鉱業にとつても極めて重要なくつかの問題を含んでいる。即ち両諸島と中国大陸との中間線まで、わが国（沖縄を含

める)の主権が拡大されるのであれば、これに含まれる陸棚面積は約二〇万平方キロに及び、これはシエル石油の山陰沖鉦区(約六万平方キロ)、東北裏日本沖の石油開発公団事業本部鉦区(約二万平方キロ)、出光鉦区(約二万平方キロ)、に較べても、極めて広大な地域である。

新野教授の調査によれば、この海域に広く第三紀(日本及び東南アジアの石油を含む時代)の地層が分布することが知られているが、この第三紀層中に油田が形成されるには、その中に石油を作り出す厚い石油母岩層(主として泥岩)と、それをためる多孔質の貯溜岩層(主として砂岩)と石油を一カ所に集積する構造(主として背斜構造)の存在が必要である。

この海域に油田の存在をたしかめるためには、空中磁力調査による堆積層の厚さの調査と音波または地震探鉦による構造調査を行わねばならないし、有望構造発見の場合は、石油の賦存状況を確認するための試掘を行うのが順序となるが、これら物理探鉦と数坑の試掘を実施するとすれば、五十億をこす莫大な資金を要することとなる。

このような大規模な石油探鉦調査にさきだつて、慎重な事前調査が必要であり、その見地よりみても、過日の会議の席上提案された尖閣諸島の学術調査は石油鉦業の面よりみても極めて有意義とみられる。

また通産大臣の諮問機関である石油、天然ガス資源開発審議会内の大陸棚探鉦研究小委員会においても、この海域を含めた日本周辺海域の石油資源の可能性の検討をとりあげ、既往資料の総合解析を行つている。

また本年十月より十二月にかけて米国政府の援助とエカツフェにより行われる黄海、東支那海の海底地質構造調査に、石油開発公団の技術者の参加を予定し、積極的に資料をしょうしうするとの立場をとつている。

このようにわが国石油鉦業界の東支那海の石油についての関心は最近になり高まつてきているが、学術的な見地とは別に、いくつかの重要な問題につき未だ判然としない点が残されており、これが一つには日本石油鉦業がこの海域に積極的に取組む気力を削いでいる。即ち。

(一) 果して日本領海(沖縄を含む)が尖閣、男女諸島と中国大陸との中間線まで認められるか。(東支那陸棚は中国大陸の大陸棚であり、単に尖閣、男女諸島が陸棚上にあることにより、この大陸棚に広い領域が主張できるか)

(二) わが国石油企業がこの海域に本格的調査を計画した場合、調査にさきだち当然鉦区の確認が必要であるが、現時点において、その鉦業権の受理、認可はどこで行われるのか。

(三) この海域における、わが国の領海、鉦業権が不明瞭な現時点において、外国企業が石油探鉦調査を開始した場合、それを阻止する権限が何処にあるか。

これら諸点について行政官庁の適切な指示と指導をとおきたい。

石油開発公団は、その主たる業務は、海外で石油探鉦を行う日本企業に対する資金供与であり、国内にあつては探鉦機械の貸与と委託をうけて基礎調査を行うものであり、公団は直

接この海域において、公団独自の探鉱作業を担当することは出来ないが、東支那海陸上石油資源については、深い関心をもち、その業務の範囲内で積極的に協力したいと思つている。

以上が岩佐氏の全文であるが、岩佐氏は大陸棚条約については触れていないことが説明としては不十分である。

次に本格的調査を計画した場合、調査に先立つて鉱区の確保が必要だが、その鉱業権の受理、認可はどこが行うかとのことであるが、いま問題になつているのは鉱物資源に関しては本格的調査をする価値の有無を確めるための学術的調査であり、(三)の点に対しては、石油開発公団でも今秋からのエカツプエの調査に参加されるとのことであるが、エカツプエとしては空中磁力調査は終了しているのである。

大体、指をくわいて外国企業のなすがまま黙つていてよいのであろうか。

岩佐氏は五十億円という莫大な資金を要すると言うが、日本における石油鉱業界の現況がそうだとすれば、それは余りにも悲しいことである。

最後に海上保安庁水路部川上参事官からの調査船などについての要旨を記述することにする。

尖閣諸島附近の水路測量及び海洋観測は充分に行われているということは出来ず、開発のためには調査団を派遣して調査することは必要である。

水路測量についていえば、開発を前提としている以上、昨年から水路部が日本周辺ではじめた地形、地質構造、地磁気および重力の同時測量が最も望ましいと考えられる。しかし、それに必要な浅海用精密音響測深機、サイズミツク・フロフアイラー、プロトン磁力計、重力計を装備し、正確な船位決定計器を有する測量船は、現在三五〇トン程度の「明洋」一隻しかなく、今直ぐこれを使用して調査することは、行動計画上不可能であり、またその性能から見ても遠距離すぎて困難である。

しかし、昭和四十四年度予算に二千トン級の大型測量船を要求しているので、これが完成すれば容易と思われる。

海洋観測については「拓洋」ならば性能的には参加が可能であるが、これも使用計画が既に組まれており、本年度の参加は無理である。

しかし、専門家の参加は、経費の提供があれば時期によつては可能と思われる、ということである。

あとがき

尖閣列島一帯に対する学術調査については結論として最初にその趣旨を述べたが、これは飽くまでも予備的調査の第一次学術調査であり、調査船については水産大学を始めとして協力して貰える大学所属の船を考慮し、その調査期日は明年六月を目途としているものである。

尖閣列島一帯に対する学術調査そのものには何人もその必要を痛感しているところであり、いろいろの意味からも明年六月の機を逸しては、取り返ししのつかない国家的損失を招来するであろうことを予言せざるを得ない。

石油開発公団の岩佐氏が大陸棚条約によつて規定されていることを、従来の領海に対する権益から問題を提起しているが、日本の領海は今日のところ三哩であるから、尖閣列島一帯における海域に対しては領海の点から言うなら、島から三哩までのところに権益が存在することとなる。しかし、筆者の提唱するものは領海としての権益を基礎としているのではない。日本政府は一日も早く大陸棚条約に加盟すべきであり、海洋開発が叫ばれている今日、日本政府としての対処方針を決定すべきである。

筆者は尖閣列島の調査に参加、協力して下された諸氏に対し、茲に深甚の謝意を表すると共に、調査報告書についてはその御労苦に対して心から感謝する。

筆者はその報告書を始め八月三十日、総理府において開催された会議に出席され、いろいろ有益な意見を述べられたものを、その後、文書によつて教えを乞うたが、その意見書については忠実に書き綴つたつもりである。

唯、琉球大学経済研究所研究員真栄城守定氏の調査報告書は、余りにも一般論だつたので、それは筆者も同感の点が多かつたので、十分、その所説は採り入れたつもりであり、石垣市役所水産課係長田盛恒武氏の報告書には台湾漁民の問題のみが力説されていたのでそれは既に日米琉諮問委員会高瀬日本代表から公式にアメリカ側に抗議され、外務省は口上書を以つてアメリカ側に申入れているので、台湾漁民の件と、南小島において難破船の解体作業に従事していた数十名の不法入域事件については一切割愛したが、この点は諒解してほしい。

沖縄の国政参加、本土との一体化と言つても、経済開発の裏づけがない限り、俗に言う絵に描いた餅に過ぎないのではあるまいか、沖縄経済の開発とは、本文にも述べたように尖閣列島一帯の経済開発こそ、正にその第一級と言うべきものであろう。

筆者の記述はもとより不調法であるが、沖縄に住む人達の幸福と沖縄の経済発展を念願すると共に、日本の将来のため、敢えて尖閣列島一帯における学術調査を沖縄側の協力を求め、早期に実施すべきことを提言して擱筆する。

(了)

※「尖閣研究 高良学術調査団資料集下」(2009年刊)より転載しました。